

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：14503

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20214

研究課題名（和文）高等部段階の聴覚障害児が持つ日本語に対する意識

研究課題名（英文）Attitudes Towards the Japanese Language Held by Deaf Children of High School Department Students

研究代表者

中島 武史（Nakashima, Takeshi）

兵庫教育大学・学校教育研究科・講師

研究者番号：20964109

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：聴覚支援学校高等部の生徒の中には、他の言語的マイノリティと同じように日本語への苦手意識をもつケースがあることを確認した。また、日本語に対する様々な認識や葛藤が確認された。例えば、多数派である聴者との人脈を作るために日本語が必要だと感じている例がある一方、仕事で使用する独特なビジネス文書の扱いに困る例、敬語の使用に難しさを感じる例などが確認された。また、漢字の読み方がわからないと恥ずかしいと感じ、周囲から勉強していないと思われるのではないかと不安を覚えているケースがあることもわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

聞こえない・聞こえにくい生徒たちは、手話だけでなく日本語を使用して生きることは確かである。しかし、日本語の習熟度の面ではマイノリティ言語を使用する外国籍児童と同じように日本語モノリンガルとの比較では苦手意識をもつケースがあると確認された。したがって、2011年に改正された障害者基本法第3条三において、手話が言語と明記されたように、手話によって社会生活を送ることを可能にする教育的・社会的施策の必要性が示唆された。また、日本に住む生活者の日本語習熟度と意識は、本研究の対象者を含め様々であり、社会生活を送るうえで必要な日本語レベルの基準を日本語モノリンガルに据えないことも重要だと考えられた。

研究成果の概要（英文）：We confirmed that some students in the upper secondary school of a deaf school have the same difficulties with the Japanese language as other linguistic minorities. In addition, various perceptions of and conflicts with the Japanese language were identified. For example, while some felt that Japanese was necessary for networking with the hearing majority, others had difficulty in handling business documents used at work, and others felt difficulty in using honorific expressions. It was also found that in some cases, a respondent felt embarrassed if they did not know how to read kanji characters and worried that others around them might think that they had not studied enough.

研究分野：社会言語学

キーワード：日本語への意識 聴覚支援学校 高等部 ビジネス文書 敬語の難しさ 漢字の読み方

1. 研究開始当初の背景

近年、手話は日本社会のなかで市民権を得つつある。法的には、2011年に改正された障害者基本法第3条三において手話が言語と明記されたことが契機となり、手話を言語として認知し手話言語を使用するための言語環境を整えようとする動きが加速している。この手話言語認知への機運は、鳥取県の手話言語条例制定(2013年)に代表されるような各種自治体による独自の条例制定にとどまらず、国単位の法令としての制定をめざす「手話言語法(案)」の動きへと連動している。

手話に対する社会的態度がこのように変化しつつあるなか、聴覚障害児を「聴覚障害」のある子どもたちという観点とは別に「手話言語の使用者」として捉えることが可能になっている。手話を第一言語とする聞こえない子どもたちは日本の言語的マイノリティであり、日本語学習の面で中国語やポルトガル語などを第一言語とするような外国籍児童と類似の困難を抱えている(中島2021)。また、補聴器や人工内耳を有効活用することで日本語を第一言語とし、手話を第二言語とする聴覚障害児の場合でも、現在の日本社会において音声情報のインプットは質・量共に聞こえる子どもと同等にはならず、その結果、習得される日本語も聞こえる子どもと同じ程度になるわけではない(中島2020)。つまり、手話を第一言語とする聴覚障害児も、日本語を第一言語とする聴覚障害児も日本語学習において困難を抱えていることに変わりはない。これまで行われてきた聴覚障害児の日本語についての調査は、その大半が小学部段階の聴覚障害児の日本語能力を分析する研究である。それらは調査者が各種の言語テストなどを用いて評価するものであった。一方で、聴覚障害児自身が日本語に対しどのようなことを感じているのかという問いは不足しており、当事者の日本語に対する意識を内面から捉えることはできていない。

このような状況を受け、本研究では、これまで対象となりにくかった高等部段階の生徒を調査対象としたうえで、聴覚障害児自身が日本語に対して何を感じているのかを分析する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、聴覚障害児自身が日本語に対して感じていることを調査し、社会の主流言語である日本語に対して持っている意識の一端を把握することを目的とした。具体的には、以下の2構成とした。

(1) 聴覚障害児は、日本語と手話を含めた自分の言語(使用)状況についてどう感じているかを検討するためのアンケート調査

高等部段階の聴覚障害児が日本語に対して何をどのように感じているのかを調査するにあたり、彼女ら彼らの生活言語である手話との比較も交えながら検討することで、より多面的に日本語への意識を把握することができると考えた。

(2) アンケート調査に参加した聴覚障害児のうち数名へのインタビュー調査

アンケート調査で得られた結果と併せて、日本語への意識をより具体的に、また詳細に把握することが重要だと考えた。

3. 研究の方法

(1) 聴覚障害児は、日本語と手話を含めた自分の言語(使用)状況についてどう感じているかを検討するためのアンケート調査

西日本にある、聴覚支援学校高等部専攻科に在籍する14名(19-21歳)を対象に質問紙調査を実施した。生活経験がより豊富であり、回答の正確性も期待できる高等部専攻科の生徒を対象とした。調査は、2023年X月に行った。対象とした聴覚支援学校の学校長に、研究の趣旨、調査対象者、研究方法、倫理的配慮等を明記した調査協力依頼書を提出し、書面と口頭での説明のうえ許可を得た。また、質問紙調査対象者の14名にも同様の書面と説明により、調査協力の許可を得た。

質問項目には、使っている補聴機器(補聴器、人工内耳、両方)、家族構成と使用言語、家族内でのコミュニケーションで使用する言語、自己認識(ろう、難聴)、聴力レベル、などの基礎情報の他、自分の日本語(読み書き)、聞こえる人の日本語(読み書き)、聞こえない・聞こえにくい人の日本語(読み書き)、自分の手話、のそれぞれに対する評価を組み込んだ。回答は「得意」「少し得意」「普通」「少し苦手」「苦手」「わからない」から1つを選択する方法である。また、日本語と手話のどちらが楽に使えるか、についても回答を求めた。この質問では、「日本語」「手話」「同じくらい」の選択肢を提示した。とで選択した回答については、その選択理由を自由記述で書くように求めた。

質問紙調査の記入に当たっては、報告者が当該の聴覚支援学校を訪問し質問紙調査のガイダンスを手話で行った。また、当該の聴覚支援学校で勤務する、手話を使用する聴覚障害のある教員にも同席してもらい、質問紙の意図が理解しにくい生徒へのサポートを得ながら実施した。

(2) 聴覚障害児は、実際の生活の中で日本語に対し何を感じているのかを検討するためのインタビュー調査

インタビュー調査への協力意思を示した3名に対し、日本社会の主流言語である日本語に対して何を感じ、どのような言語的バリアを経験しているのかを1人あたり約60分の半構造インタビューによって聞き取った。インタビューは、事前に許可を得たうえで録画した。インタビューでのやり取りは、調査者自身が手話により実施した。録画した会話データは、調査者が日本語に文字起こしし、聴覚支援学校を卒業した手話話者の大学院生にチェックを受けた。

4. 研究成果

(1) 聴覚障害児は、日本語と手話を含めた自分の言語（使用）状況についてどう感じているかを検討するためのアンケート調査

日本語と手話のどちらが楽に使えるか、についての結果を示したものが図1である。対象者14名の高等部専攻科生徒のうち、日本語が楽は4名、手話が楽は6名、同じくらいが4名であった。楽に使うことができる言語として、やや手話が多いものの日本語と手話の間にそれほど人数の差はなかった。

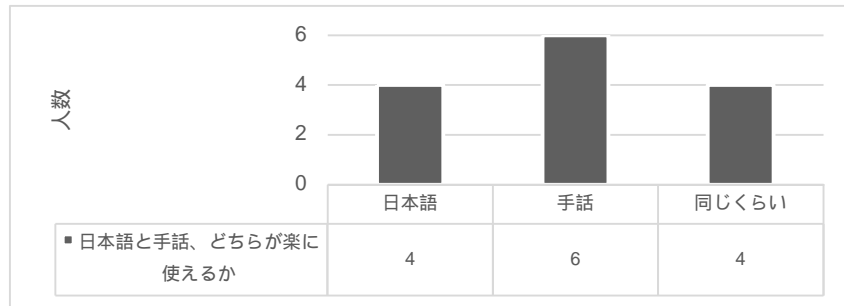


図1 楽に使える言語

日本語が楽と答えた4名の属性のうち共通する項目としては自己認識があげられ、4名とも「難聴」と自分を規定していた。また、聴力レベルは比較的軽度(3名)または人工内耳を装用(1名)していた。反対に、手話が楽と答えた6名は、全て重度または最重度の聴力レベルであり人工内耳装用のものはいなかった。自己認識については、4名が「ろう」2名が「難聴」であった。手話が楽と回答した6名には2名のデフファミリー出身者が含まれており、自己認識は2名とも「ろう」であった。日本語も手話も同じくらいと答えた4名では、聴力レベルは比較的軽度(2名)または人工内耳を装用(2名)していた。

日本語が楽と答えた群の自由記述(理由欄)では、「手話覚えるの苦手」や「日本語を手話に変換して使用する為、日本語の方が楽」などの回答があり、主に日本語による言語生活を送ってきたであろう生徒の存在と、第二言語として手話を使用している様子が推察された。手話が楽と答えた群では、「声を使わなくても伝わる」「声出さなくて済む」のように発声を回避する利点と、「手話だったら、安心が出来るし、分かりやすい」「話の内容が分かる」のような不安なく、わかりやすいコミュニケーションを取ることができる利点があげられていた。

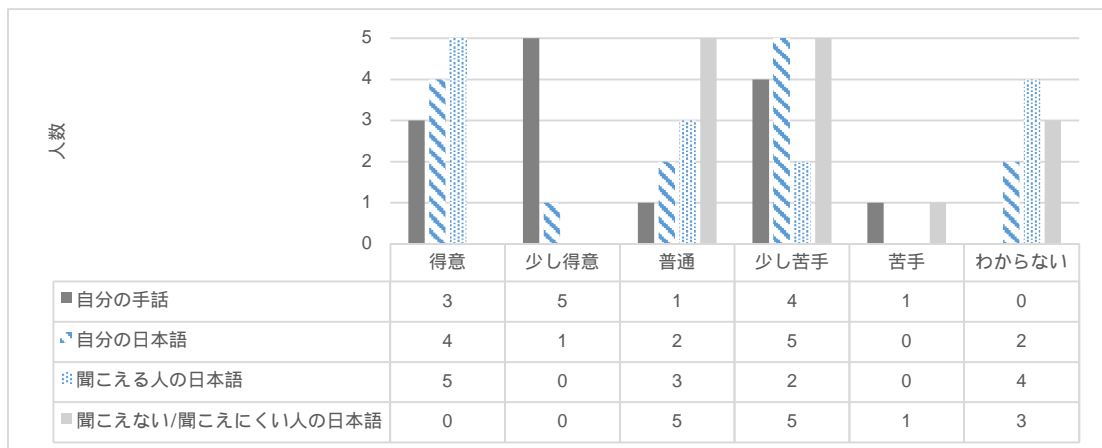


図2 日本語と手話に対する感じ方のまとめ

図2はの結果をまとめたものである。聞こえる人の日本語(読み書き)についての評価は、「得意」「少し得意」の合計が5名であるのに対し、「少し苦手」「苦手」の合計が2名である。

一方で、聞こえない・聞こえにくい人の日本語（読み書き）についての評価は、「得意」「少し得意」の合計が0名であるのに対し、「少し苦手」「苦手」の合計が6名である。今回対象とした高等部専攻科生徒にとって、日本語を扱う力に関しては、聴覚障害者がより苦手で、聴者がより得意だと感じられていることが読み取れる。

自由記述（理由欄）からは、聴者は「聞こえる分、情報収集できる」「情報が耳に入るから、自然にできるようになるというイメージ」などの回答があった。聴覚障害者に対しては「一般の人と違って情報が足りない」「聞こえない、聞こえにくい分、周りと比べて遅れがある。情報収集しにくい。」などの回答があった。日常生活における情報量の差が、日本語の得意不得意に影響を与えているとする考えが読み取れた。情報が音声媒体に隔たり、視覚情報が音声情報と同等には整備されていない社会の現状が、聴覚障害者の日本語に対するやや低い評価につながっている可能性がある。ただし、自分の日本語については、「得意」「少し得意」の合計が8名であるのに対し、「少し苦手」「苦手」の合計が5名であった。つまり、聴覚障害者に対する日本語イメージよりも「高い」自己評価がなされる傾向が見られた。この理由を推察するために自由記述（理由欄）を確認すると、「健聴者との関りがあり、間違ったところは指摘されていたから。」のように聴者との関りが多いことや、「文を書くという練習をたくさんしてきただけでなく、文を読むことや書くことが好きだから。」のように、日本語を読み書く回数が比較的多いことが自分の日本語への「高い」評価につながっていると考えられた。

（2）聴覚障害児は、実際の生活の中で日本語に対し何を感じているのかを検討するためのインタビュー調査

3名のインタビューデータの分析からは、日本語に対する様々な認識や葛藤が確認された。例えば、日本社会の多数派である聴者との人脈を作るために日本語が必要だと感じている聴覚障害児がいる。その一方、仕事場面での使用が想定されるような独特のビジネス用語の扱いに困っていると述べる例もあった。その他、敬語の使用に難しさを感じている例、などがインタビューでは確認された。さらに、日本語を使うにあたっての意識として、漢字の読み方がわからない場合に「恥ずかしい」と感じることもインタビューからわかった。また、漢字の読み方がわからないことが知られた場合、周囲の人たちから、勉強していない人だと認識されてしまうのではないかという心理面での不安を感じていることも併せて述べられた。

（3）本研究のまとめと課題

本研究では、聴覚障害児自身が日本語に対して感じていることを調査し、社会の主流言語である日本語に対する意識の一端を把握することをめざした。アンケート調査の結果からは、日本語を扱う力は聴覚障害者がより苦手で、聴者がより得意だと感じられていること、その一要因として、情報が音声媒体に隔たり、視覚情報が音声情報と同等には整備されていない点が懸念されていることがわかった。インタビュー調査の結果からは、生活の中で具体的には敬語やビジネス用語に難しさを感じていることや、漢字の読み方がわからない時に恥ずかしさを感じる例があることがわかった。

本研究の対象は、聴覚支援学校高等部の中でも専攻科に在籍する生徒に限られた。そのため、当該の聴覚支援学校高等部生徒の全てを調査した訳ではない点が本研究の限界のひとつである。高等部1学年の生徒と、進学ないし就職を目前にした専攻科2学年の生徒では、日本語への意識に違いがあることは想定され、今後さらなる検討が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中島 武史	4. 巻 26
2. 論文標題 日本語の「形」と「質」について 聞こえない・聞こえにくい人たちにとっての困難	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 123 ~ 132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19024/jajls.26.1_123	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中島武史	4. 巻 65(2)
2. 論文標題 多言語社会出身ALTとの言語にまつわる学び 聴覚支援学校高等部生徒の言語観教育に向けて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ろう教育科学	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中島武史
2. 発表標題 ろう学校高等部専攻科生徒の言語意識の一端 聴者・聴覚障害者の日本語に対するイメージ
3. 学会等名 ろう教育科学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中島武史
2. 発表標題 ろう学校生徒の日本語への意識
3. 学会等名 情報保障研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------